

「敢えて拾う人になる」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ ギアをローに戻して、ゆるゆると進んでいきましょうか

何度も手を合わせ、何度も頭を下げた夏です。各地で自然災害は頻発し、暑さは尋常でなく、だから私は出張などで寺社を見かける度に神様仏様に手を合わせて唱えました。「私のまわりの方々をお守りください」と。また、本校の校門を通る際も頭を下げました。「神戸高校の生徒をお守りください」と。特にこの夏は念入りに。昨年度にこの「校門一礼」について書いた通信がありますので、今回はそれをつけます。

だから第2学期始業式の式辞もそのことへの感謝から始めました。無事に登校してくれて有り難う、と。その次に何を話したらよいか。考えた末に辿り着いた結論は「火中の栗の話をしよう」ということでした。

秋にちなんで、栗の話をしたと思います。栗、わかりますよね。秋を代表する味覚、栗です。17世紀のフランスの詩人、ラ・フォンテーヌの「寓話」に「猿と猫」という話があります。こんな話です。

昔々、ある家に猿と猫が暮らしていました。あるとき、家の主人が暖炉で栗を焼いているのを見て、それを食べなくなった猿が、猫にこんなふうに持ちかけます。「君はああいうのを取るのがうまいから、ひとつ、その腕前を見せてくれよ」と。おだてられた猫は、手をやけどしそうになりにながらも、栗を一つ一つ取り出していきます。ところが、その一方で、その栗を猿が一つずつ食べてしまっていた、という話です。

ここから「火中の栗を拾う」という言葉が生まれました。「うまく言いくるめられて、他人のために危険をおかしてしまう」という意味です。しかし最近では前向きに誰かのために、または自分自身のために進んで危険をおかす場合にも、使うようになってきています。「敢えて火中の栗を拾う人」、実に格好いいと思います。

熱々に焼けている栗、美味しいに決まっています。香ばしいに決まっています。それを見て、拾い上げる自信がないからか、見ない振りをして通り過ぎる人生もあれば、敢えてそれを拾い上げる人生もあります。拾えない人になって、拾える人にあるものは何か。自分への自信です。「自分なら拾い上げられるかもしれない」という自分への期待です。その根底には努力して能力を培ってきた過去があるのでしょう。

気づいてくれている人もいるかもしれませんが、今年の私は実に多くの役割を任されてしまい、出張ばかりしています。本音を言えば、ずっと学校にいて皆さんの活動を見ていたいんです。私も教員ですから。でも、誰かが「火中の栗」を拾うことで世の中は廻っています。誰かが拾わないと、世の中は正しく回りません。その役割を周囲から期待されるのであれば、どんなに熱くても笑いながら自分が拾おう、今はそう考えています。

これから先の人生で皆さんは何度も「火中の栗」を目にすることと思います。「それを拾って自分のものにしたら、自分の人生はもちろん、世の中もよい方向に変わる」そう思える何か。その時、見ない振りをするのか、見ない振りをしたくないから日々、自分を鍛えるのか。果たして自分はどんな生き方をするのだろうか。

自身の幅を広げたこの秋の皆さんが、栗を眺める度にそのことを思い出してくれたら嬉しいな、という言葉をもって私からのお話とさせていただきます。今日もご清聴、ありがとうございました。

「火中の栗」の話をしようと決めたのは、8月8日発行の進路指導通信の中の藤友先生のメッセージに感銘を受けたからです。「若いみなさんにとって重要なのは何者であったかではなく、これから何者になるかということです。大きく成長しつつある自分を認めてあげてください」。

心を打つ言葉です。すっかり大人になった私でさえも、ちょっと背筋が伸びましたから。

さあ、新しいスタートです。高めに入っているギアをいったんローに下げ、焦ることなく順々にあげていきましょうか。いつの日か自分の願う「何者か」になりたいのであれば。



「校門一礼」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 新春、こんなことを思っているのです

この4月に県立神戸高等学校に赴任した私は第22代校長となりました。第16代校長は最初の通信に書かせてもらった岡野幸弘先生です。県教委に勤務することとなった私に、先生は心構えを説いてくれました。

「学校の先生方はみんな必死に頑張っているんです。あんたはその先生方を指導しないとイケない立場になった。それなら先生方から『あぁ、こいつはちょっと違うな。こいつの話なら聞いてもいいか』そう思われる存在にならないと駄目です。『県教委って、この程度か』そう見下されたら私たちの存在に意味はありません。しっかり勉強して、成長しなさい。あんたには格好いい指導主事になってほしいんです」

格好いい外見をした指導主事になるのは不可能ですが、努力を重ねて「こいつはちょっと違うな」と思われる程度の内面をもつ人にはなりたいと強く念じながら、働くことができたのは岡野先生のお蔭です。

第17代校長の溝口繁美先生と第18代校長の竹内弘明先生には私が40代前半の頃から部下として仕え、多くを教えていただきました。今はお2人とも新天地でも活躍しておられます。『リンリンチャンチャン』という名でコンビを組み、天下のM-1グランプリ1次予選を2度も突破したのですから凄いいお2人です。

第19代校長の中野憲二先生は私が県教委のルーキーの年に、いわゆる直属の部下として県教委のイロハから教えていただいた先輩です。当初はよく指摘されました。「あんたの書く文章はよく言えば情緒的だけど、行政としては冗長や」と。通信などばかり書いていた教諭時代の柔らかさが抜けなかったのですね。確かにお役所の文書に情緒は不要。よく文章を直していただきました。自分勝手に生意気で、そのくせ甘っちょろい私を一人前の行政職員となれるよう粘り強く導いてくれたのは、まぎれもなく中野先生でした。

第20代校長の世良田重人先生はとにかく優しい方でした。先生の部下として働いている頃に、私の両親への遠距離介護が始まったのですが、そのことも気にかけてくださいました。ひとつ忘れられないエピソードがあります。その優しい世良田先生が課長という役職につかれた時、何か違うオーラを1枚纏われたように私には見えたのです。失礼な私は思ったことをそのまま口にしました。すると先生は言われました。

「わかりますか？ 嬉しいな、ありがとう。実は先輩に教わったんですよ。『トップはかわしたり、いなしたりしたらあかん。がっぷりよつの横綱相撲で物事に向き合なあかん』って。だから、今はそれを心掛けながら、仕事をしているんです」 世良田先生。先生の教え、私は今も大切にしていって生きています。

第21代校長の西田利也先生とは同じ年から県教委で勤め始めました。感情の起伏が激しい私と違い、いつも冷静沈着な先生は、私にとってはずっとお兄さんのような存在でした。つらかった時も先生がいたから乗り切れたと思うことが何度もありました。だから校長職を引き継げたことは実に光栄なことなのです。

毎朝、校門を抜ける際、私は立ち止まり一礼することにしています。胸の中で唱えます。『今日も1日、生徒たちをお守りください』と。唱える相手は私をここまで導いてくれた6人の先代校長先生方です。もともとはかねてよりお慕っていた県立高校の校長先生が校門一礼をされているのを知り、「それは私もしたい」と思ったのが始まりです。ちなみにその方は今、私立高校に勤めておられますが、そこではかねてより全校生徒が同じように頭をさげているそうです。素敵な学校文化だと思います。

さあ、明々後日は3学期始業式です。誰ひとり生命を落とすことなくその時を迎えられそうで、それはとても嬉しいことです。加えて終業式で宿題を課しましたね。自分について考えること、できましたか。1人でも多くの生徒がちょっとだけ晴れやかに校門を通れますように。

